

オックスフォード市の社会福祉について

三 好 豊太郎

目 次

- 一、はしがき
- 二、オックスフォード市の起源と推移
- 三、オックスフォード大学出身の社会指導者
- 四、現在のオックスフォード市の社会福祉
- 五、結語

一、はしがき

イギリスのオックスフォード市は学園都市として、ヨーロッパにおいても有名であり、その永い伝統と特徴ある大学制度を通して、多くの社会指導者が輩出し、またその社会福祉政策もよく進められている。

私は一昨年及び昨年の夏の休暇を利用して同地に赴き、これらに関する史料や社会福祉の状態を調査するため、公私の施設を訪問し、種々考究した。これにより、大学制度の歴史的発展と、大学出身者の社会指導的活動並に同市の社会福祉活動との間に密接な関連があることが察知されるようになった。ここにその概要を記すことにより。

二、オックスフォード市の起源と推移

都市としてのオックスフォード市の性格を知るためにまづ、その史的発展の概要を見ることにする。(註1)

オックスフォードはエドワード王が九一二年に、チャーネル川とテームス川との交わる三角州の、牛の渉れるような浅瀬にデンマーク人の進撃に備えるため保塁を設けられたところである。最初はここに城壁を作る予定であったが、ローマの技術者達が粘土を扱うことを嫌ったためにそれは遂に実現しなかった。

その後、川を用いて木材や石を運搬することが盛んになるに従って、しだいに発展し、人口も増加し、一〇八六年のウイリアム一世の土地台帳の出来た頃はイングランドで六位までの都市となったこともある。

ヘンリー二世王の一六七七年に、パリにいたイギリス学生が呼び戻されたとき、学生は何等宗教的管理の下になかったことや、オックスフォードがそれらの多数の学生を住まわせることができるほど、東部イングランドで最大の都市であったことなどが原因となって、彼等はここで自衛的な集団として生活することとなった。

市民は最初は大きな収入源として学生を迎えていたが、大学が益々繁栄するにつれて、これを営利の対象とするようになり、次第に学生との間に永い感情的な不和が生ずるようになった。そして市民は完全に大学を支配する結果となり、一一九九年には国王からその領域内の凡ての土地を購入し、用水や土地の貢租を免ずるといふヘンリー二世の特許状も入手した。かくて学生は市民の貪欲のままに経営される宿舎に住む義務さえも負わされるようになった。このために学生は暴動に訴えて、之に反抗したが、それはあえなく市民の勝利となったために、大学は止むなく数年間解散されることとなった。

大学は遂にローマ法皇に援助を求めた。法皇は寄宿舎や、学生の宿泊所の家賃を統制することを命令し、それによって大学関係者は勝利をもって旧態に復した。そしてカトリックの教団は一二二一―四年に亘って、その学生数を増加し、従来の大学の講堂は、学生を住まわせるように改築し、市民の所有していた宿舎はそれにかわって大学がひきつぎ、更にそれを拡張した。こうして一三世紀の終りまでには、学生全部に利用される十分な講堂ができた。それと同時にユニヴァーシティ、マートン、ペーリオールの三カレッジが創立され、大学は完全に都市とは独立したばかりでなく、すでに都市をも支配するに至った。

一二四八年には大学に新しい憲章が設けられ、市長及び六〇人の自由市民は大学の自由を尊重する宣誓を行い、この行事は一八五六年まで続くこととなった。

更に一二五二年には大学は学生を包含する司法権を規定し、その世紀の終らない中に、大学生の為に働く非聖職者（主に使用人、商人）にまでそれを拡大し、これらの人々をそれまで名譽総長法廷だけが裁判のできる学生と同様の取扱いをした。そして新にエクセター、オリエンタル、クイーンズ、及びニューカレッジ等のカレッジを新設し、大学は益々都市に対して優越であったので、またしばしば市民との間に緊張関係がつづいた。

一三五五年二月十日その最も激しい衝突のあった時には、セント・マーチン教会の鐘が市民によって鳴らされると共に、メリー大学教会の鐘は学生により、その武力を結集し、直ちに市街に向って出撃するために鳴らされた。この時の暴動は堂々たる戦いにまで発展し、翌朝までに五十人の学生と多数の市民が死亡し、しばらくは市民が優勢であった。しかし国王の干渉がすみやかに行われ、市民と大学は共にその憲章や特権を放棄させられた。そして四日間で大学のそれは復権したが、都市にはそれがなかった。

かくして大学は遂に勝利を納め、市民に対しては年々悔い改めの行事を行わせ、名譽総長の権限は拡張され、それは日用品の価格、度量衡制度の吟味、夜警の管理、罰金の収納、入学許可台帳の管理にまで及んだ。そして都市は實際上無力となった。

大学は益々隆盛となり、十五世紀に更に三カレッジを新設し、十六世紀には宗教的影響もあって、大学に対する国王の関心がいよいよ深められた。しかし名譽総長であったウルジーと国王との争いのため市民に又もや新しい欲求を起させ、事実上の解散令を受けることとなった。幸いにしてそれが実施されないうちにエリザベス帝の即位を見るようになり、市民に対して女帝が緩和策を取られたために無事にその難局を経過し、この世紀においても、六カレッジが増設された。

十七世紀の宗教改革においては、大学は終始、国王に忠誠であり、チャールス王は闘争期間中オックスフォード

ドに本部をおき、一六四三―四年にはここに居住された。暴動終了の後はクロムウェルが名譽総長に在任した。十八世紀には政治的には静穩であつて、僅かに旧教徒の入学を拒んで、ジェームス二世に反抗したに止まり、またカレッジの増設もなかつた。この時期において、大学ははじめて記述による試験制度を採用した。

都市との対抗が最終的に終つたのは十九世紀であつた。即ち一八〇〇年に毎年行つてきた大学に対する市民の悔悟の行事は之を廃止し、一八二五年にはそれに伴ひ罰金の支払も止め、一八八九年には市場並に夜警に関する大学の支配権もなくした。また大学制度として学位授与に対する宗教的差別を行うことを止めると共に、カレッジは大学における教授講師の維持のために、各カレッジの基金の一部を譲ることとなつた。そして新に女性だけの四カレッジが開設された。

二〇世紀となるに及び、イギリスの黄金時代が来た。イギリス本土の富と合せて、アフリカその他の富も国内に流入し、それと共に貧困や労働階級の増加となり、オックスフォード大学の中から、貧困からの解放や、政治的自由を指導する人々が現われるようになった。

かくして第一次及び第二次の世界大戦を経過するようになり、大学に対する国家の責任も益々強化され、一九六〇年には年々二百五十万ポンド以上が補助され、在学生は九〇〇〇〇人に及んだ。

学生が初めてバリからオックスフォードに来てから、まさに九〇〇〇年になる。その当時今日のようにカレッジと大学が共に、設けられるという、世界にその比を見ない大学制度が実現することを予言する人があつたであらうか。今やオックスフォードは真に均衡のとれた智識の交流の場として、世界のための大きな責任と榮譽とを引受けようとしてゐる。

ここにあげたオックスフォード市の歴史的發展によつても明らかのように、オックスフォード大学とオックスフォード市とは、対立と協力との密接な関連をもつて生長した。このような社会的環境は、その独特のチュートリアル、システムによる制度と共に、大学からの進歩的な社会改良の分野における指導者の輩出となり、イギリス全

士ならびに、オックスフォード市の社会福祉の形態やその内容に、大きな影響を与えるようになったものと、考
えることができるのではなからうか。

三、オックスフォード大学出身の社会指導者

いまここに特に、社会指導的色彩の強いオックスフォード大学出身者をあげて、その思想の一斑を挙げるこ
とにしよう。

a、ジョン・ラスキン John Ruskin

「この最後のものにも」 Unto this Last, 1862 の名によって発表されたものが、彼の思想の代表的著書
である。その一節に次のように書かれている。(註2)

「英語の *valor* は健康や強さを現わし、人のばあいは即ち勇氣のあることを現わし、物のばあいは即ち価値の
あることを現わすラテン語の *valere* から転じている。だから価値があるとは生命に対して役に立つことである。真に
価値があり、役に立つものは、その主力をもつて、生命を導くものである。それが生命に向つて導かないとか、まをその強さが破壊される
程度に應じて、それは価値が少くなり、またそれが生命から遠ざかる程度に準じて、無価値又は有害となる。」
これによって見れば、彼は価値を内面的主観的に見て居り、これを外面的客観的なものと見るばあいと大いに
相違している。このような立場から、当時のリカードの賃金の法則や、マルサスの人口論の主張と対立し、経済
の倫理化を提唱した。

b、アーノルド・トインビー Arnold Toynbee

ラスキンのこの著の出づる頃、既に東ロンドンの労働者街の貧困の状態は目にあまるものがあつたので、ラス
キンは同じくオックスフォード大学出身のバーネットと一八六〇年に会合し、どのようにして改善するかについ
て、いろいろと相談し、遂にバーネットは東ロンドンの教会牧師に就任し、オックスフォードの学生や教授にその救援

と指導とを求めた。その中の一人がトインビーであった。彼の東ロンドンの活動については、拙著「社会事業精義」に詳記してあるから、その一節を紹介しよう。(註3)

「一八七五年オックスフォード大学を去るに臨んで、経済学をもって身を立てようとして定められたが、彼の本来の使命は社会改良と宗教改革にあり、しかも健康がこれを許さないから、死ぬる前にその中のどちらでも、なすことができたなら満足であると書いてある。このような高潔な人格を持つ彼トインビーは、友人の間でも早く既に使徒トインビーの名が高かった。彼のセント・ジュードの牧師館における生活は、けなげにもまた勇しいもので、クラブや組合の会員となり、慈善組織協会の訪問員となり、またできる限り、労働者に接近しようとしたので、その他の独立した労働者の協会にも関係した。そうして政治上の問題については直ちに友人関係を作ることができたが、宗教上の反対意見などをきかされて、少なからず閉口したことがあった。しかし機会に接する毎にますます教化の必要を痛感し、社会の注意をこれに向けるように、強調することが肝要であると感じた。……：：：：：ジョーウエット博士によれば『彼は労働者の生活に近づくことができるように、自分の室を半ばしか家具の整わない室で暮らすこととし、彼等のクラブの仲間に入り、しばしば悪いウイスキー、下等の煙草、じめじめした空気の中で、物質や精神の問題、自然の法則や神の法則の問題について議論した』と。」

トインビーの没後遺稿として発表されたのが「イングランドにおける一八世紀の産業革命」の書である。そして更に彼の献身の地であった東ロンドンにセルメント・トインビー・ホールが建てられた。私は一九六四年にここを訪れ、その建物の一部が第二次大戦によって破壊された状態を見ながらも、彼の歴史に残した大きな建設の姿を、偲ぶことができた。

c、ウィリアム・ベバリッジ William Beveridge

彼はオックスフォードのユニヴァーシティー、カレッジの出身であり、卒業後トインビー・ホールのセツラーや館長をやり、かたわら失業者問題の研究に二五年間の年月をささげ、遂に「失業―産業組織の問題一九〇九年」

を出版し、同時に、イギリス初代の職業紹介局長となり、後長く出身カレッジの学長であった。一九四一年の第二次大戦後の、イギリス社会福祉計画の重任を負うこととなり、遂に有名な「社会保険及び関連サービス」の報告を完成し、これによって国民の全社会保障計画を確立することとなった。これは誠に全人類に対する生活の安定と保障を規定したものであり、これによって自由世界における新しい文化の基礎が成立したものと見る事ができる。

ここにあげたようにラスキン・トインビー・ベヴァリジは共に密接な関連があり、殆んど先輩が後輩にバトンを渡す形で、仕事が継承され、先輩の遺業や遺志の上に、後輩の努力が集積されたものと見ることが出来る。

四、オックスフォード市の社会福祉

前述したベヴァリジの社会保障構想は、一九四五年に法律として制定され、全国的に実施されている。したがって市の公的扶助はその社会福祉部の統制の下に、組織的な行政として行われ、その外に篤志的な社会福祉が行われている。尚同市住宅部や老人福祉事業団等の施設もあるから、遂次項を別にして述べることにしよう。

A、公的自宅救助

人口約一万人を数えるオックスフォード市の公的自宅救助は次のような三区域に分れて、救助している。組織はほぼ同様であるので、一区だけをあげると、

第一区、人口三万人、クワリー外四地域を含む。割合に外国移住者、貧困者、非行少年が多い。

福祉事務所 二ヶ所

地区管理者 一名、上級ケースワーカー 二名、ケースワーカー 一二名（この中四名老人福祉担当）、
ケースワーカー助手三名（パートタイマー）、ホームヘルパー管理助手 一名

同様にして第二区、第三区は人口四万人づつ、福祉事務所も二ヶ所づつ、地区管理者以下の人員の配置は全く

これと同一である。学校出の有資格ケースワーカーはオックスフォード市社会福祉部を通じて四〇名である。その中各地区から一名ずつ計三名は交代で、毎日市社会福祉部に出勤し、ケースワーク窓口相談に応ずる。たまたま社会福祉学校入学のため、欠勤者のあるばあいは、通学期間二―三年間の代理者をおく。

更に毎週一回は各地区管理者会議及び各地区別チーム会議があり、毎月一回は全体チーム会議があり、三ヶ月に一回（不定期）は中央オックスフォード市役員を含めて、会議を行っている。尚ホームヘルパーは現在全市で常勤九〇人居り、年予算七〇、〇〇〇ポンド、三、六〇〇時間であるが、実際は一五〇人が居り、常勤以外の分は凡てパートタイマーで補っている。

B、篤志自宅救助

老人を含む自宅救助全況に亘る大きな運動が一九六一年にオックスフォード市内で組織されている。市内ヘッディングトンに住むレスリー・テラー Leslie Taylor により初められ、今日では世界各地に拡がり、魚の会の運動 Fish Scheme Movement と呼ばれている。その成立の趣旨は、各自の家庭で、何等かの救済を得たい事故が起った時は、直ちに迅速に救済を実施することができる、篤志的な市民組織である。これは古代ギリシャにおいてキリスト教迫害があったときに、魚の絵を見せてキリスト教信者であるという証拠にしたという故事に因んでいる。

急病で医者呼べない時、何か人手のほしい時、留守がほしい時、食事の仕度の手伝いの欲しい時、急用で外出したい時などに、予め、老人や貧困者等の家庭に配ってある魚の絵を、門口その他の特定の場所に掲げると、巡回の篤志者がそれを発見し、立所にその所置が講じられる組織である。組織の基準としては一五人で医者一人を含む委員会を作り、これに地区代表者三〇人、篤志者三〇〇人、対象人員三〇〇人とされている。オックスフォード市では現在一七ヶ所にこの組織の成立を見ている。これは日本の民生委員組織に似ているが、地区代表者と篤志者とを有する点において、必要な至急の希望が、迅速に処理される特徴をもっていると思われる。

C、老人フラット

a、公営フラット

市参事会の住宅局が安い家賃で、特に老人用の貸部屋の貸付を行い、そこには必ず老人の世話をする所長又は寮長をおいて管理している。前述した社会保障制度により、健康で自ら家事のやれる老人や、老人ホームに行くことを好まない老人が行く。市内に六ヶ所あり、大体同じ規格であるので、その一つであるヘッドリー・ハウスをあげると、室代一週二ポンド、二二室あり、現在二六人が住み、図書室、来客室、集會室、浴室は共用、前オックスフォード市長の母堂も、健康そうにしてここに居られた。

b、民営フラット

一八六六年以来全国住宅協会が行っているもので、オックスフォード支部のものが、現在市内に八ヶ所ある。その一つであるハリス・コートは一週五―八ポンドで三八室ある。居室、ベッドルームなど美しく飾られていた。所長又は寮長の居ること前と全じ。

c、篤志老人フラット

イギリスの歴史的存在であるアームズ・ハウスが、一七〇〇年オックスフォード大学ニューインカレッジ学長ストーンの寄附により設けられた。それが今日まで継続され、全然無料で利用されている。ストーンズ・ハウスがそれである。二四室あり、基金からの収入三〇〇〇ポンドで寮長の俸給、修理その他の維持費にあてている。これと同様なカトリック修道院フラットが五ヶ所ある。

D、老人ホーム

オックスフォード市では身体虚弱な家事の出来ない人だけがこれを利用するから、主に九十歳以上の老人が収容される。それでも公営で八ヶ所ある。いづれも六〇人が定員である。最近に出来たものは全部が個室で、それ個性的に利用されている。その他篤志で一三―三六人を収容する無料のものが一〇施設ある。

Ⅴ、デー・センター運動

オックスフォード市郡の老人福祉事業団が指導援助する老人クラブであつて、これにa公費を主とするもの、b私費を主とするものの型がある。何れも何等かの篤志家の活動が大きな役割を占めている。クラブの開催は週一日だけ食事、娯楽、手芸だけを行うものと、これを各組が交代で毎日利用するものがある。

結 言

ここにオックスフォード市の推移、社会改良の指導者、並に市の社会福祉の概要を調査したところによつて、次の諸点が明らかになつたと認められる。

一、オックスフォード市と大学との数百年に亘る摩擦と対立とは、相互の権益の争奪に関する深刻なものであつた。これを通して大学と学問の価値とが、きびしく追求された。そして学生に対しては大衆指導の意義を理解させる機会を作り、市民に対しては学問の価値が問いただされるようになった一面のあることを、認めることができる。

二、オックスフォード大学の長期に亘る伝統はよく先輩と後輩との継承関係を作つた。特にそのカレッジ生活の特徴はこれを強め、先輩が開拓し、着手した問題がよく後輩に継承され、それが次第に蓄積され、生長したことが認められる。

三、現在のオックスフォード市の第一線の社会福祉は、またオックスフォード大学の出身者を含んで行われ、その根底となつてゐる社会保障制度はベヴァリッジの構想が基となり、それに前述した先輩の思想が影響してゐるものである。

引用文献

- 1, *The Ariel Press, The Colleges of Oxford and Cambridge 1963* pp. 9-11
 - 2, *Into this Last* (Beverman's Library, p. 168)
 - 3, 拙著「社会事業精義」昭和14年、582-3頁
- 本稿中の社会福祉については Oxford Council 在任の Miss A. M. Sporkes 及び Oxford City Chamber の Mr. M. Stanley 等の援助によることが多い。特記して謝意を表す次第である。